

骨の形成促すタンパク質 免疫異常疾患を抑制

徳大教授グループが解明



高浜洋介教授

人の骨の形成を促す「RANKL(ランクル)」

と呼ばれるタンパク質が、関節リウマチなどの免疫異常疾患を抑制する重要な役割を果たしていることを、徳島大学疾患ケムセンターの高浜洋介教授のグループが突き止め

た。免疫異常疾患を根本的に治療する方法の手掛かりとなる成果として、十九日、米科学誌「イミユニティ」で発表した。免疫反応の司令塔として体内で自己と異物を区別しているのはT細胞で、胸骨の裏側にある臓器「胸腺」でつくられている。T細胞が正常につくられるためには、胸腺の中心部分にある組織

「髄質」が不可欠と分かっていたが、どの分子が髄質の形成にかかわっているかは不明だった。グループは、髄質が形成される分子機構を遺伝子解析。T細胞がつくられる過程で生まれるタンパク質の「RANKL」が髄質の形成を促していることを突き止めた。

「RANKL」を薬に 응용して免疫作用を正常にすることで、関節リウマチやシェーグレン症候群といった免疫異常疾患の治療につながる可能性がある。高浜教授は「今後の研究で、発生病因がほとんど分かっていない自己免疫疾患の原因解明や治療につなげたい」と話している。